

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

英語音声学の授業を考察する：補助教材の役割

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 博 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/5697

英語音声学の授業を考察する

——補助教材の役割——

長谷川 博

1. はじめに

本学の短期大学部で、1995年度から「英語音声学」(必修科目)を担当して、1998年度までの4年間に使用してきた教科書は、『音声英語の理論と実践』その他3冊で、テキストの主な項目は、「発声器官」「母音」「子音」「アクセントとリズム」「音声変化」(「連結・同化・脱落現象」)「音調」であった。

(注) 穂谷学舎でも英語音声学を担当したが、年によりクラス数やクラスサイズが異なったので、ここでは、クラス数や学生数に大差のない片鉾学舎の授業実践の報告である。

授業展開としては、発声器官の名称等を学習した後、カセット・テープの助けを借りて /i:/ を含む単語(eat, see, etc)約15語を練習、続いて /i/ を含む単語(inn, fit, etc)を同じように15語ほど練習し、その違いを理解・習得させるために、2音 /i:/ と /i/ を含む単語、すなわち、対比による最小対語(heat-hit etc)の練習を行なった後、/i:/ と /i/ をできるだけ多く含む長さ10語程度の文を5文(一例 The teacher has been ill for three weeks.)を練習。このように単母音12、二重母音8 [米語 9]、子音24を順序に従って練習をして、次の学習項目に移るようにテキストは構成されていた。

(注) 発音記号[i]に関しては、3「補助教材」(発音指導)の項で述べる。

科目の性質上多くの練習を欠かせないのであるが、「練習が単調で、授業が退屈である」との声をときどき耳にすることがあったので、三年目の最後の授業で学生の授業に関する感想を求めた。その中で最もショッキングのものは単語に関するもので、個々の単語の発音練習だけでなく——対比、短文、対話を含めて——単語に関する練習の占める割合はテキスト全体の38パーセントであったにもかかわらず、単語の発音に「かなり自信が持てる」(13%)、「ある程度自信が持てる」(19%)、「あまり自信が持てない」(21%)、「どちらとも 言えない」(47%)

であった。このような結果が出たわけだけでも、この時期にはすでに次年度の教科書は決定していたので変更するわけにもいかないから、確認の意味で四年目の授業は進行したのである。そこで、大学英語教科書協会に所属する出版社から「音声学」に関するテキストを何冊も取り寄せたのであるが、当然のことながら、「音声学」と名のつくテキストはどれも単語の練習に多くのスペースを割いていた。ちなみに、これまでに採用したテキスト4冊の平均として、単語が占める割合はテキスト全体の40%である。

またこの頃に、英語科教育法や Comprehensive English 担当者から「最近の学生は発音記号も読めない」という声もよく耳にしたので、学生に授業に関する感想を求めた中に「発音記号」など音声に関する調査もした。この調査結果も考慮して教科書の決定に至るのである。

2. 教科書決定に至る

そこで、これまでの3年間の授業形態を「初心」に戻り考え直してみても、次のような結果が得られた。

- 1) 学生の単語の発音が正確・上手になり、また聞く力・話す力がつくことを目標として授業が展開したのであるが、そのために「練習また練習」と練習に力点を置き過ぎ、授業が単調になったことは否定できない。
- 2) それぞれの学習項目を迫る余り、とにかくテキストを終えることに注意が注がれすぎたきらいがある。
- 3) テキストを教えることを重視して、テキストで教えることをなおざりにしていた。
- 4) 必要に応じて、もっと補助教材を授業に活用すべきだった。

そこで思い出されるのは、R. Kingdon が *English Intonation Practice* の introduction (p.xiii) の中で述べている言葉である。

「外国人の発音が正確で強勢や音調が不正確な方より、発音が（許容範囲内で）拙くても、強勢や音調が正しい方が、英語を母国語とする者には理解しやすい」

上記1)～4)の反省点をふまえ、1999年度のテキストはこれまでとはまったく異なったテキストを使用することになった。テキスト名は『英語のリズムとリスニング』（英宝社）である。

このテキストは20課で構成されており、各課は6つのセクションからなり、奇数課と偶数課ではセクション（3）で扱う題材が異なり、他のセクションはほぼ同じである。

(1) Illustration

イラストを見ながら、短い英文をテープで聞き、英文がイラストと一致するかどうかを確認する。なお英文の一部が空白になっていて、そこに入る英語を補う形式になっている。

(2) Conversation

20行前後の短い英会話文がテキストに示されていて、そのあとに2種類の問題がある。1つは Listening Comprehension で、もう1つは Multiple Choice Comprehension である。前者では英文が5つ示されており、その英文が会話文の内容と一致するかどうかを確認するもので、後者は設問だけがテキストにあり、テープで3つの選択肢を聞いて、どれが正しいかを選択するものである。

(3) Rhythm

奇数課では、英語らしいリズムを習得するための題材が提示されている。すなわち、英語のリズムで重要な働きをする文強勢、機能語の弱形、語間の連結、縮約形などを扱う。

偶数課では、Question Formation を行なう。短い英文をテープで聞き、その英文を引き出すような疑問文を作る。文のどの部分を変え、どの疑問詞を使うかは、テキストに示されている。

(4) Multiple Choice Listening

男性と女性の1回ずつの対話文を聞いて、その内容を理解しているかどうかを確認する。対話文と設問をテープで聞き、テキストに書いてある4つの選択肢から答えを選ぶ。TOEFL や英検等で見かける形式の問題である。

(5) Translation

男性と女性の1回ずつの対話文や2、3行の短いパッセージを日本語に通訳する。完璧でなくてもよく、英語の意味をおおよそ伝えていれば「よし」とする。

(6) Expression

2人一組になって、テキストに提出されているトピックについて14行程度の会話文を書く。これは宿題である。

3. 補助教材

上のテキストでは「英語音声学」の授業としては不十分であるから、適宜必要に応じて、プリントをはじめとして、補助教材で補う。これが授業の展開に大きな役割を果たすことになる。そのことに関して順次説明することにする。

1) 発音解説

『ロイヤル英和辞典』の「発音解説」(pp.2068~2074)から「発音器官」「有声音と無声音」「子音」(上記の有声音か無声音の区別のほか)発音器官のどの部分(調音点)を用い、どのように発音するのか(調音方法)によって、次のように分類される。「子音分類表」 a) 閉鎖音、b) 摩擦音、c) 破擦音、d) 側音、e) 鼻音、f) 半母音。そしてこれに続くそれぞれ

の音と特徴、特に「閉鎖音」では、日本語の無声閉鎖音と異なり、[p]、[t]、[k] の次に強勢のある母音が続くときには、[p^h]、[t^h]、[k^h]のように気音を伴って強く発音される説明があり、その後に24の個々の子音を順に調音器官を示す図と共に教語を示してある。

続いて「母音」は、舌の高さの程度や口の開きぐあいで分類され、母音を表す発音記号を発音時の舌の位置と高さをもとに9つに仕切った四角形の図 [米音・英音] が示してあり、それに参考として日本語の母音の舌の位置も示され、その後に短母音や長母音の発音の際の口の形を示す図と共に各々の母音を含む単語が教語があげられ、二重母音、三重母音と説明が続く。なお、三重母音に関しては [二重母音 + /ə(r)/] のように発音されるので、三重母音と認めないのが最近の考え方である。以上、概説した後、次の2)に移る。

2) 子音の特徴

上記をより具体的に説明するものとして、藤井『現代英語発音の基礎』(子音、pp.138~140)、松坂『英語音声学入門』(子音、pp.64, 65; pp.74, 75)から詳述する。

まず英語子音の発音は、口の構えに (1) 閉鎖 [狭窄] (2) 持続 (3) 開放という3つの過程がある。(1) で両唇を閉じ [狭め] (2) で呼気圧を高め (3) でその高められた呼気を急激に開放する。英語子音発音の特徴は (2) の持続過程が長くここで著しく呼気圧を上げて、後の母音の頂点へ向けて鋭く開放するための力の「タメ」をつくることにある。一方、日本語子音の特徴は閉鎖・狭窄の構えはきわめて軽くし、できるだけ素早く後の母音に移る点にある。

3) 引く母音・とめる母音

次に母音であるが、これも藤井『現代英語発音の基礎』(pp.174, 175)から、一覧表にして日本語と関連させて説明をする。

次の一覧表で例えば、(ア)/a:/ の場合なら、car; arm; star; park などの母音である。アよりもっとよく口を開け、喉をよく広げて声をだすのが秘訣。つまり喉をきれいにするために水などを含んでうがいをするときの声の出し方と同じ気持ちで、喉の奥のほうから声を出すとすっきり英語らしくなる。以下、残りの母音についても説明が続く。

	引く母音					声とめ母音						(図1)	
日本語	ア	イ	ウ	エ	オ	なし	ア	イ	ウ	エ	オ	なし	なし
英語	a:	i:	u:	なし	ɔ:	ə:	ʌ	i	u	e	ɔ	æ	ə

簡略記号:/i/、精密記号:/i/
簡略記号:/u/、精密記号:/u/

4) 発音指導

(1) /i:/ と /ɪ/, /i/

Longman 英英 と ライトハウスやニューブロード英和では、/i:/ と /ɪ/ および /i/を、Cambridge 英英では /i:/ と /ɪ/ を使用しているけれど、その他の英和辞典においては、/i:/ と /i/ だけしか使用していない。/i:/ と /i/ は、発音の仕方も音質も違う別種の音であるが、このように表記するとこの2つが同じ音質で、長さだけが違うように思われるので /ɪ/ を使用する方が、日本語を母国語とする者には適当である。

そこで次に、/i:/ と /ɪ/ を含む単語の練習 (例、heat-hit)であるが、/ɪ/ は「イ」と「エ」のほぼ中間音であるとテキストや辞書には説明してあるけれども、差をはっきりとさせるためには、/i:/, /ɪ/, /e/ の3つの音を含む単語、例えば、beat-bit-bet を聞かせて、差を理解させてから、繰り返し言わせる。もう一層完全を期すためには、beat-bit-bet の後、すぐに bet-bit-beat と逆戻りすると差がより明瞭になり、その後折に触れて注意をしているうちに /ɪ/ を含む単語の発音が正確になってくる。

(2) /r/ と /l/

また、日本人が苦手としている発音 /r/ と /l/ に関しては、日本語の「ラ行の子音」[弾音 (発音記号は/r/)]も含めて指導する方がより正確になる。片山『英語音声学の基礎』(pp.59～61)からプリントを活用して説明をした後、

Warm-up として、舌先が口腔内でどこにも触れないように /ra·ri·ru·re·ro/ とする練習を、続いて舌をしっかりと歯茎に押しあてて /la·li·lu·le·lo/ とする練習をさせる。その時、日本語の「ラ行の子音」のように弾くことがないようにしているかどうか確認させる。その後、/ra·ri·ru·re·ro/ /la·li·lu·le·lo/ を3、4回繰り返し練習させるとその差がよくわかり、続いて対比による最小対語(read-lead etc)の練習をさせる。以後、必要に応じて /r/ や /l/ に注意を向けるように指導していると、学生はこの2音の発音の差にある程度確信を持つようになる。

5) 二重母音

日本語にも「あい (愛)」、「おい (甥)」、「あう (会う)」、「おう (追う)」のように、英語の二重母音に似ているものもあるけれど、それらはただ「単音が連続」したものである。

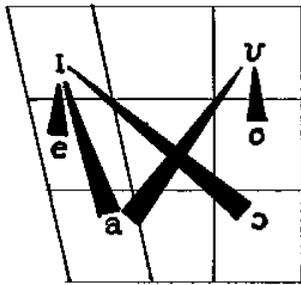
英語の二重母音は、二つの母音が一つに結合して、最初の母音から次の母音へ緩やかに移行するもので、前の母音の方がより強く、より長く発音され、後の母音は弱く短く消え入るよう発音される。従って、前の母音を「主音」、後の母音を「副音」と言う。言い換えれば、英語の二重母音は主音に始まって副音の方向に移動し、副音が示す位置まで移動しきらないうちに終わってしまう「一つの音」として一音節で発音される。

(1) 上向き二重母音

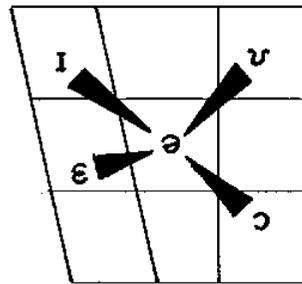
主音から副音に移行するとき、舌の位置が /i/ の方向に移動するもの3種類 /eɪ/、/aɪ/、/ɔɪ/ と /u/ の方向に移動するもの2種類 /au/、/ou/ 合計5種類の二重母音がある。/i/ または /u/ に向かって上昇するので上向き二重母音と呼ばれる。

(2) 中向き二重母音

主音から副音に移行するとき、舌の位置が /ə/ に向うもの4種類 /ɪə/、/eə/、/ɔə/、/ʊə/[米音] の二重母音がある。中央母音 /ə/ の方向に向って集中するので中向き二重母音と呼ばれる。なお、英音は /ɔə/ の発音はほとんどなくなり、一般に /ɔ:/ のみがいわれている。



(図2)
上向き二重母音



(図3)
中向き二重母音

だから、日本語を母国語とする者にとっては、英語の二重母音が同じ大きさの発音記号で書かれていることは間違いのもとである。多くの英語学習者は日本語と同様に二重母音を同じ強さ、長さで発音する傾向がある。そこで、図2や図3のように示すと、英語の二重母音の理解が容易になり、より正確に発音されることになる。

6) 音声変化

英語の自然な話しことばでは、その中に含まれる母音や子音が一音ずつ明瞭に発音されるのではなく、その周囲の環境によりさまざまな音の変化が起きることが多い。これは発音を滑らかにするために起こる現象で、それには音の連結・同化・脱落などがある。テキストでは連結の説明はあるので、緒方『英語音声指導』から同化(pp.99~101)と脱落(p.103)のプリントを主に、説明を加える。

(1) 同化

ある音が、後続または先行する音に影響を及ぼして同じ音か似た音に変えたり、相互に影響

し合って変化することを「同化」という。分類法の一つ、同化の作用による分類によって説明をする。

a) A B : 進行同化

前の音が後続する音を同化する場合。

open /óupn/ → /óupm/ (/n/が前の/p/の影響で/m/になる)

serve /sâ:v/ → reserve /rizâ:v/ (/s/が前の母音の影響で有声化して/z/になる)

b) A B : 逆行同化

後続する音が前の音を同化する場合。

worth /wâ:θ/ → worthy /wâ:ði/ (/θ/が後ろの母音の影響で有声化して/ð/になる)

gone /gò:n/ → gone back /gò:m bæk/ (/n/が後ろの/b/の影響で/m/になる)

c) A B : 相互同化

隣接する二音が相互に影響しあい、両者に似た別の音に変化する場合。

1. /s/ + /j/ → /ʃ/ I miss you. Miss Yuko Yamada is here.

2. /z/ + /j/ → /ʒ/ Is your sister coming? Do as you like.

3. /t/ + /j/ → /tʃ/ Don't you know him? Aren't you tired?

4. /d/ + /j/ → /dʒ/ Would you like to dance? Did you have a good time?

(2) 脱落

音の脱落は、自然な速度で話すときに起こりやすい。

a) 調音点や調音法が近い子音が連続する時、前の子音が脱落することがある。

good time /gù(d) táim/ black coffee /blæk(k) kófi/

sit down /si(t) dáun/ blind man /bláin(d) mæn/

b) 強勢のある音節の後に強勢のない音節が二つ続く時に、最初の弱い音節の母音[a]が脱落する。

chocolate /tʃák(ə)læt/ mystery /míst(ə)ri/

c) 強勢のない母音/a/に/l, r/と弱い母音/a/が続く時に、前の/a/が脱落することがある。

camera /kæm(ə)rə/ different /dif(ə)rənt/ family /fæm(ə)li/

7) 音調 [抑揚]

話し言葉で重要な働きをする音調について、V.J. Cook は *Active Intonation* の Introduction (p.ix) の中で次のように述べている。

「音調の間違いを耳にする英国人は、外国人の文法の間違いを許容しても音調の間違いは許容しない。それは外国人が、人に対する態度が間違っているからである。

『お早よう』という挨拶の言葉が美しく発音されていても、音調が怒りを帯びているような

らば、何も言わないよりも悲惨な結果を招く恐れがある」

そこで先ず、1) 上昇調 2) 下降調 3) 下降・上昇調 4) 上昇・下降調 5) 平板調の説明をした後、頻度的に多い1)～3)の文をテープで練習を、特に3)は含みのある音調で、例 I can't come \today. 「今日は来られないのだが(他の日なら来れるかもしれない)」
(cf. I can't come \today. 「今日は来れない)」

日本人の学生には難しい音調なので、他に幾つか例をあげて練習をした。

そこで、テキストの対話文で20課全てにおいて、テープを一通り学生に聞かせた後、元へ戻り、文における強勢のある語に強勢記号をつけさせ、日本語と違って英語は強勢と強勢とがほぼ等しい間隔で現われる「等時間隔性」があることにふれ、(日本語の「機関銃のようなリズム」と違って)「波のうねりのようなリズム」を理解させ、また文の途中や終わりにおける抑揚にも記号を付けさせ、十分に復習をして次の授業に臨めるようにした。学生に少なくとも1回は対話を行なわせた。もっとも、みんなの前で英語を読んだり話したりする機会が入学以前にあまりなかったのか、何度も声を大きくするように注意したが、声が小さいままであることが多く、学生が個々の単語を間違っただけで発音したとしても訂正が難しい状況であったので、発音の方は注意があまりできず、音調の指導に重きを置く授業になった。

4. 授業のアンケート・感想

1999年度および2000年度入学者それぞれの最初の授業時に「短大入学以前」の音声教材に関するアンケートを、また1999年度および2000年度の最後の授業時に「授業を振り返って」アンケートを、特に2000年度の場合は「授業の感想」も求めた。その結果は次の通りである。なお、アンケートに答えた学生数は、1999年度は172人(上段)、2000年度は168人(下段)である。

1) 短大入学以前に関して

- (1) 発音記号／(ほとんど) 習わなかった・少し習った・かなり習った・無回答
 35人(20%) 110人(64%) 12人(7%) 15人(9%)
 42人(25%) 107人(64%) 8人(5%) 11人(6%)
- (2) 単語の発音／正確に発音する自信がない・少し自信がある・かなりある・無回答
 (2000年度のみ) 39人(23%) 98人(58%) 3人(2%) 28人(17%)
- (3) 強勢の違いによる意味の差 [例えば a dāncing girl(踊り子)、a dāncing girl(踊っている少女)] (ほとんど) 習わなかった・少し習った・かなり習った・無回答
 110人(64%) 17人(10%) 5人(3%) 40人(23%)
 112人(67%) 48人(28%) 0人 8人(5%)

(注) 強さの程度は第1強勢:(´)記号、第2強勢:(ˆ)記号、第3強勢:(˘)である

英語音声学の授業を考察する

- (4) 音調による意味の差 [I beg your pardon を「上り調子」で言うと「すみませんがもう一度お願いします」、「下がり調子」で言うと「ごめんなさい」のように意味が変わる]

(ほとんど) 習わなかった・少し習った・かなり習った・無回答

101人(59%) 13人(7%) 5人(3%) 53人(31%)

87人(52%) 73人(43%) 0人 8人(5%)

- (5) 英語を読む [話す] 時のリズム感 [2000年度のみ実施]

(ほとんど) 自信がない・少し自信がある・かなりある・無回答

73人(43%) 59人(35%) 3人(2%) 33人(20%)

2) 音声学の授業終了時

- (1) 単語の発音/正確に発音する自信がない・少し自信がある・かなりある・無回答

10人(6%) 124人(72%) 10人(6%) 28人(16%)

17人(10%) 118人(70%) 8人(5%) 25人(15%)

- (2) 文に強勢 [強弱] をつけて読む [話す]

(ほとんど) できない・ある程度できる・かなりできる・無回答

24人(14%) 122人(71%) 11人(6%) 15人(9%)

30人(18%) 106人(63%) 8人(5%) 24人(14%)

- (3) 文に音調 [抑揚] をつけて読む [話す]

(ほとんど) できない・ある程度できる・かなりできる・無回答

41人(24%) 96人(56%) 20人(11%) 15人(9%)

37人(22%) 85人(51%) 4人(2%) 42人(25%)

- (4) 英語を読む [話す] 時のリズム感

(ほとんど) ない・ある程度ある・かなりある・無回答

22人(13%) 105人(61%) 11人(6%) 34人(20%)

29人(17%) 106人(63%) 6人(4%) 27人(16%)

以上、英語音声学を学ぶ前と後を比べてみると、学習した効果がよくわかるのであるが、アンケート項目よりも学生の「生の感想文」を記した方がより明白なので、代表的なものをいくつか列挙する。なお、一人の学生が、2、3の項目に関して書いているものもあり、総数(226)は実際の学生数(168)をかなり上回った。

発音 (63)

- ・正確な発音ができるようになった。 ・正しい発音の方法が身についたと思う。
- ・本当の発音に近付くことができるようになった。

- r, l ははじめ、いろんな単語を習い、一寸だけ自信を持って話せるような気がする。
- 以前は r, l の区別がつかなかったが、今は何となくわかるようになったと思います。
- 同じ単語でも前後関係やスピードで発音記号が変わったりするのがわかりよかった。

例 bread and butter (/n/ と発音するのがとても印象的です)

リスニング (39)

- たくさん英語を聞いたのでリスニング力がかなりついたと思う。
- リスニングの力がついて早いスピードの会話にも慣れることができた。
- リスニングの力がついて英検のリスニング問題もある程度とけるようになった。
- 聞く力がかなりつき TOEFL のリスニングも前よりは聞き取ることができた。
- TV とかで英語が話されていても、ある程度理解できるようになってきた。

リズム (25)

- リズムの勉強ができ、棒読みだった英語が少し英語らしくなり嬉しかった。
- リズムを付けて読むと何か早く読めるようになって、すごく嬉しいです。
- リズムを付けて読むことが大切であることがわかり、文にリズムを付けるようになった。

強勢 (18)

- 文や単語の強勢を学んだので、読む際にリズムに気を付けるようになった。
- 今まで以上に文に強弱を付けて読むよう心掛けるようになったのがよかった。
- 今まで気にしてなかった強勢や単語の脱落・同化を学べてよかった。

発音記号 (12)

- (うやむやだった) 発音記号がある程度わかる [読める] ようになった。
- 発音記号がどれだけ大切かが理解できたような気がします。
- 発音記号が読めるようになり、他の教科にもとても役立っている。

英文を読む (11)

- 英文を流暢に読みたいと思っていたので、音声学を受けリズム感や強弱が勉強できて、少しはうまく読めるようになった。
- 今までよりも本物っぽく「女のパート」を読めるようになった。
- 前より英文にリズムを付けて読めるようになり、英文を読みたい気が高まった。

音調 [抑揚] (10)

- リズム感がものすごくつき、やたらと音調を正確に話せるようになった。
- 英語を話す時、リズム感や抑揚を付けることがとても重要だということがわかった。

連結・同化 (8)

- 連結・同化を意識することで英語らしく文を言えるようになった気がする。
- 今まで洋楽を聞いていて疑問に思っていた点 (as long as you/7ツ' ɜ/, promise you/ミツ=)

が、本当にこんな感じの発音なのか疑問だった)が明らかになり嬉しかった。

白紙・特になし (18)

その他 (22)

- ・今まであまり考えたことのない発音も奥が深く、プリントや教科書を通じて学べた。
- ・発音についてあまり勉強にならなかった。もう少しネイティブの人の発音で勉強したかった。発音記号とかは役に立つのですか？
- ・結局、最後まで発音の違いや、音調の付け方はわかりませんでした。強勢については、高校でも習っていたので、少しでも理解を深めることができました。
- ・音声学の勉強をして、もっと混乱してしまいました。

5. 中学校・高等学校学習指導要領

学生が発音記号を知らない「読めない」ことに関して、外国語(英語)学習の目標や一年間の授業時間数を、またその中での発音記号の取り扱い方を知る手がかりとして、現行の学習指導要領を調べてみた。

1) 中学校学習指導要領・外国語編(英語)(1989年改訂。1993年度から実施)

(1) 目標の改善の要点(p.3)

教科の目標については、コミュニケーション能力を育成し、国際理解の基礎を培うため、次の点を重視して改善した。

ア 国際化の進展に対応して、コミュニケーション能力を一層育成する。

イ コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度を育てる。

ウ 外国及び我が国の言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う。

(2) 発音表記の指導(p.92)

「音声指導の補助として、必要に応じて発音表記を用いて指導してもよいものとする」その解説として、発音表記は、生徒にとって実際の音声を学習する橋渡しの役割をつとめ、また、自学自習への道を開くための補助手段としての意味を持つものであると言える。

発音表記の指導については、すべての表記を系統的に指導するとか、いずれかの学年で重点的に指導しなければならないというものでもなく、必要に応じて利用していけばよい。その際には、むしろ、発音表記の指導により生徒の負担が過重になることのないように配慮することが必要である。

(3) 別表第2(p.101)

必修教科、道徳、特別活動、選択教科を含む一年間で学習する総授業時数がまとめて

あり選択教科の授業時数については、外国語は各学年において105から140までを標準とする、とある。すなわち、各学年共一年間に外国語を学習する時間は、一週間に3時間から4時間ということになる。なお、この表の授業時数の1単位時間は、50分である。

2) 高等学校学習指導要領・外国語編（英語編）（1989年改訂。1994年度から実施）

(1) 改訂の要点(pp.8,9)

改善の基本方針に基づいて、高等学校の外国語科及び各科目について次のように改訂した。

- ① 目標は、外国語を理解し表現する力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深めること。
- ② 生徒の能力・適性等に応じた指導が一層可能になるようにするため、科目の構成を改め、コミュニケーション能力の一層の育成を図ることを基本として、総合的な英語力の育成に重点を置いた指導、聞くこと及び話すことの能力の育成に重点を置いた指導、読むことや書くことの能力の育成に重点を置いた指導など、多様なカリキュラム編成ができるようにした。
- ③ コミュニケーション能力を育成するための言語活動を一層活発にするために、科目により指定されていた言語材料を弾力化した。
- ④ 国際理解の基礎を培うため、教材選定の観点を改善し明確化した。

(2) 外国語科に属する英語に関する科目及びその標準単位数は、次のとおりである。

(pp.13, 14)

科 目	標準単位数
英 語 I	4
英 語 II	4
オーラル・コミュニケーション A	2
オーラル・コミュニケーション B	2
オーラル・コミュニケーション C	2
リーディング	4
ライティング	4

(注) 「英語 I」は、英語を選択する生徒に最初に履修させる科目であり、中学校の英語の内容との関連を踏まえつつ、それを発展し、聞くこと、話すこと、読むこと及び書くことの言語活動を総合的に行なわせて学習させるものである。

「英語 II」は、「英語 I」を履修した後、聞くこと、話すこと、読むこと及び書くことの言語

活動を総合的に学習させるもので「オーラル・コミュニケーションA、B、C」は、いずれの学年でも履修させることのできる科目で、Aは会話を中心、Bは聞き取ることを中心、Cは話し合うことを中心、とした言語活動を行なわせて学習させる、「リーディング」「ライティング」は、「英語Ⅰ」を履修した後、それぞれ読むこと、書くことの言語活動を重点的に行なわせて、やや進んだ内容を学習させるものである。

(3) 内容の取り扱い [発音表記の指導] (p.28)

「音声指導の補助として、発音表記を用いて指導するよう配慮するものとする」

その解説として、英語の音声を習得する際に、発音表記に慣れていて、それを見て音声を再現することができれば、音声の習得はより容易なものとなる。また、自学自習の有効な補助手段ともなる。

しかし、専門的に、詳しく指導することは生徒に過重な負担をかけることとなるおそれがあるので、基本的な表記について、必要に応じて指導することが望ましい。

6. おわりに

英語音声学は、科目の性質上練習を多く必要とする科目で、正確を期すれば期するほど、練習は次から次へと繰り返しが必要となる。音声学のテキストは大なり小なり単語の練習に費やすページ数が多いので、これだけでかなり単調な授業展開となりがちである。そこでその単調さを少しでも少なくして、授業の効果を少しでも多くする方法の一つとして試みたのが今回の授業実践である。

話し言葉としては、単語の発音の正確さよりも強勢や音調の果たす役割がずっと大きいので音声学の授業ではあるけれども、音声学のテキストではなく音声教材を使用して、音声学で学習すべき項目を補助教材を使用して補っていく方法をとったわけである。幸いにも、学生にはこの授業形態がかなり好評だったので、授業は、テキストを教えるというより、テキストで教えることが大切であることを再確認した。

また、学生が発音記号も知らないという意見に対して、学習指導要領で確かめる限りにおいては「発音表記を用いて指導してもよいものとする」(中学校)とか「発音表記を用いて指導するよう配慮するものとする」(高等学校)程度であるから、筆記試験が主体の現在の受験体制のもとでは、音声教育にあまり時間がかけられていないのが現状であるけれど、英語の綴りは、その読み方に関してとても不規則であるから、発音記号を知る必要性は十分あるように思われる。

使用テキスト

- 松井 千枝 『英語音声学』(朝日出版社) 1996
三宅川 正・増山 節夫 『英語音声学——理論と実際——』(英宝社) 1994
杉森 幹彦他 3名 『音声英語の理論と実践』(英宝社) 1997
片山 嘉雄他 2名 『英語音声学の基礎』(研究社) 1996
渡辺 和幸 『コミュニケーションのための英語音声学』(弓プレス) 1995
大塚 高信監修 『米会話発音教本』(南雲堂) 1995
根間 弘海・B. スマイリー 『英語のリズムとリスニング』(英宝社) 1999

参考書

- 大高 博美 『英語音声教育のための基礎理論』(成美堂) 1998
緒方 勲監修 『英語音声指導ハンドブック』(東京書籍) 1995
川越 いつえ 『英語の音声を科学する』(大修館) 1999
藤井 健三 『現代英語発音の基礎』(研究社) 1986
松坂 ヒロシ 『英語音声学入門』(研究社) 1992
中学校指導書・外国語編・文部省 (開隆堂出版) 1998
高等学校学習指導要領解説・外国語編 (英語編) 文部省 (教育出版) 1998
V.J. Cook: *ACTIVE INTONATION* (Longmans) 1969
R. Kingdon: *ENGLISH INTONATION PRACTICE* (Longmans) 1958

辞書

- CAMBRIDGE *International Dictionary of English* (Cambridge University Press) 1995
LONGMAN *Dictionary of Contemporary English*・3rd Edition (Longman) 1995
OXFORD *Advanced Learner's Dictionary*・6th Edition (Oxford) 2000
浅野 博 『フェイバリット英和辞典』(東京書籍) 1996
川本 茂雄他 3名 『講談社英和辞典』(講談社) 1994
木原 研三・福村 虎治郎 『新グローバル英和辞典』(三省堂) 1994
國広 哲弥他 2名 『プログレッシブ英和辞典』(小学館) 1999
小西 友七編集主幹 『ジーニアス英和辞典』(大修館) 1996
竹林 滋・小島 義郎 『ライトハウス英和辞典』(研究社) 1990
長谷川 潔他 3名編 『ニューブロード英和辞典』(ベネッセ) 1995
宮部 菊男・杉山 忠一 『ロイヤル英和辞典』(旺文社) 1994